

補遺. 蝶類學者仁禮景雄先生

保科 英人¹⁾

I. 唯一顔写真がなかった蝶類學者仁禮景雄

一流の国際誌に論文を出すためには最新設備を必要とする分子生物学とは異なり、昆虫学、特に昆虫分類学の分野では民間のアマチュアであっても、大きな成果を残すことができる。特に多くの愛好家を擁する蝶類学では民間研究者の学術的寄与は大きい。その一人が明治大正期に活躍した仁禮景雄（1885-1926）である。仁禮は長命と健康に恵まれず、処女論文から生涯最後の論文発表まで僅か 10 数年の研究活動期間であったが、台湾や琉球列島からの新種発表のほか、日本産蝶類目録を編纂し、日本の蝶類学に大きな足跡を残した。白水(2006)掲載の日本産チョウで言えば、ヤエヤマウラナミジャノメ *Ypthima yayeyamana* Nire, 1920 は仁禮の手によって記載された種である。

日本の蝶類学への貢献度少なからぬ仁禮であるが、その生涯は謎に包まれていた。長谷川仁は近代以降の日本の昆虫学者列伝を執筆した際、「本稿に掲載したい研究者だったが、資料不備のため収録できなかった」学者の一人に仁禮を挙げている（長谷川, 1967）。つまり、長谷川自身は仁禮の関連資料を集めようと努力したフシが見られるが、思うようにいかなかったようである。

21 世紀に入っても、仁禮の生涯は簡単な略歴しかわからず、謎のままであった。例えば、白水隆文庫刊行会編（2007）は近代以降に日本の蝶類学に貢献した学者 200 人余りの略歴と顔写真を掲載したが、仁禮は唯一写真未掲載である。これはある意味奇妙な話である。と言うのも、仁禮景雄自身は一生ほぼ在野の民間研究者であったが、父の仁禮景範（1831-1900）は海軍大臣、参謀本部海軍部長、海軍大学長を歴任した明治海軍の重鎮であり（福川編, 1999）、また姉の春子は斎藤実（1858-1936）に嫁いだことから、景雄は総理大臣経験者の義弟にあたる。さらに、仁禮景範は子爵であったから、景雄はれっきとした華族の一員でもある。このような生まれにもかかわらず、白水隆文庫刊行会編（2007）には 200 人の蝶類研究者の顔写真がずらりと並んでいるのに、子爵家の御曹司の仁禮景雄だけが蝶の標本写真なのは、極めて不可思議である。

令和 2 年冬、筆者は幸い仁禮景雄の孫にあたる松田紀久子さんに直接会い、お話を聞くことができた。そして、松田氏は景雄の写真を提供してくださったので、ここに白水隆文庫刊行会編（2007）で唯一未掲載だった仁禮の顔写真を紹介できる運びとなったのである。加えて、遺族に伝わった景雄の生涯を以下に記すこととする。

II. 仁禮景雄の家族

写真 1 は松田紀久子さんが提供してくださった、本邦初公開となる成人後の仁禮景雄である。生涯病弱だったとの先入観があるせいか、線が細く見える。父の如く海軍軍人として颯爽と軍艦に乗り込む姿は想像しにくい。写真 2 と 3 は、同じく松田氏所蔵の写真で、前者は明治 14 年当時の仁禮で、後者は撮影日時不明である。

仁禮景雄の生涯で判明したことは保科（2015a; 2015b）で既にまとめた。本稿で改めて詳細を繰り返すのは頁の無駄なので、以下仁禮の略歴を簡単に書き記しておく。仁禮景雄は明治 18 年、海軍軍人の仁禮景範の四男として生まれた。明治 37 年、海軍兵学校に入学するも、健康に恵まれず明治 40 年同校を退校した。明治 42 年にチョウの処女論文を発表した。明治 43 年 3 月、雑誌『海軍』の記者として軍艦「生駒」に乗船、南米、



写真 1 仁禮景雄。松田紀久子氏所蔵の写真の背景を一部修正したもの。撮影日時不明。

¹⁾ Hideto HOSHINA 福井大学教育学部



写真2 仁禮景雄 (明治14年).



写真3 仁禮景雄 (撮影日時不明).

欧州, エジプトを巡り, 同年10月に帰国した。大正5年, 生涯最大の研究業績となる日本産蝶類目録を『動物学雑誌』上で連載開始した。大正6年, 分家して華族の籍を離脱, 以後平民となる。大正10年, 最後の研究論文を発表するも, 大正15年, 満年齢41歳で死去した。

今回, 筆者は景雄の家を含む仁禮家の系図を松田氏よりご提供いただいた。ただ, この系図は景雄の長男である仁禮一(「にれ・はじめ」, 松田氏の父)が記憶に頼って作ったものらしく, 細かいところで間違いを含む可能性はあると言う。とりあえずこの系図に従うと, 景雄の妻は「いよ」と言い, 旧姓は斎藤である(注, 義兄の斎藤実とは無関係)。景雄には長女の露子と, その下に長男の一の2人の子がいた。そして, 仁禮一の子は松田氏を含む娘2人なので, 現在仁禮姓を名乗る景雄の子孫はいない。

景雄の子孫からは虫好きは出なかった。その代わりに, 仁禮一は軍艦オタクで, ヨーロッパの高価な軍艦雑誌にカネを惜しみなくつぎ込み, そのせいで妻の道子と夫婦喧嘩になったこともあったらしい。どうやら, 仁禮景雄の海軍の血は景雄の子孫にも受け継がれたようである。

景雄の妻のいよは昭和47年2月17日死去した。また, 大正9年生まれの子の一は平成19年2月20日に亡くなった。息子の一は父親とは異なり, 天寿を全うしたわけだが, それにしても景雄の長男が比較的最近まで存命だったと言うのは聞いて驚いた。長谷川仁が近代日本昆虫学者列伝を発表した昭和42年(1967年)時点で, 妻のいよはまだ健在だったわけだ。長谷川が彼女の存在に辿り着き, ヒヤリングを実施していればとは思うものの, 今となっては詮無きことである。

III. 海外での罹病と結婚

仁禮景雄が明治43年に南米と欧州を回ったことは上述の通りだ。後に妻のいよが語ったところによると, どうやら景雄は外遊中に結核性のカリエスに罹ったらしく, 帰国後は養生を余儀なくされた。ここで, 改めて白水(1985)掲載の仁禮の研究業績一覧を参照してみた。仁禮の処女論文は明治42年(1909年)であるが, その次の論文は大正5年(1916年)まで間が開く。筆者は「仁禮の明治43年10月帰国後の動向は掴めない」と書いたが(保科, 2015a), この頃仁禮は病に臥せており, 到底チョウの研究どころではなかったと考えれば, 一応の辻褄は合う。そして, 九州大学に残る仁禮景雄コレクションには, 明治44年4月から8月に捕られた東京産チョウ標本が多数残るが, 半年間の療養で何とか小康を取り戻した仁禮が近所で網を振った, との推測も可能である。

仁禮の結婚は奇しくもこの療養生活と関係がある。仁禮家では5人ほどの女中が雇われており, そのうちの一人が看護婦として景雄の看病にあたることになった。そして, その女性こそが静岡の御殿場の農家出身で景雄の妻となるいよである。野暮な言い方をすれば, いよは看病の過程で仁禮に見初められたわけだ。

大正5年頃, 景雄といよの間に長女の露子が生まれた。この時点で景雄は分家しておらず, したがって仁禮子爵家の華族の一員である。残念ながら二人の入籍は認められず, 露子は里子に出されたとのこと。しかし, 大正9年になって, 長男の一が生まれたので, 「長男が生まれたのならやむなし」と二人の婚姻が認められた。時代が違ってしまうとすればそれまでだが, 「女の子の次に男の子が生まれたから, 二人の関係を認めましょう」との発想は現代人からすればモヤモヤする話ではある。なお, 本稿を書くにあたり, 仁禮一が生まれた前後の仁禮家の事情を知るべく, 景雄の義兄である斎藤実の

日記(国立国会図書館憲政資料室所蔵)を調べたが、特に手掛かりは得られなかった。『斎藤実日記』には斎藤の会談相手として時折「景雄」の名前が出て来るものの、何を協議したかまでは記されていないので、あまり参考にならない。

さて、いよは景雄の妻として認められたが、残念ながらもめでたしめでたし、とはならなかった。いよは故義父の景範の妻である仁禮壽賀子との関係に苦しんだ。ざっくばらんに言うなら嫁姑問題である。そもそも海軍中将の正妻で、夫の景範死後の仁禮家を取り仕切る壽賀子と、4男の妻で静岡の農家生まれのいよとは、仁禮家における立場が違い過ぎる。さらに、いよにとっては不幸なことだったろうが、東京青山霊園にある墓石に刻まれた数字によると、壽賀子は昭和4年まで存命だった。つまり、その分だけいよの苦悩も長かったはずである。いよは子供を背負って線路に飛び込もうと思いつめたこともあったらしいから、到底よくある姑による嫁いびりの枠に収まる話ではない。

では、妻が自殺を考えるほど姑との関係に苦悩する中、景雄は一体何をしていたのか?母と妻の間に挟まれてオロオロしていたのか、それとも明治の男らしく「嫁ならそれぐらい自分で何とかしろ!」といよを突き放したのか。実はこれがさっぱりわからない。と言うのも、いよは自分の子孫に「祖父は蝶の学者だった」程度のことしか語り残していないからだ。また平成19年まで存命だった長男の一にしても、幼少時に父の景雄を亡くしているうえに、肺の病気を持っていた父とは生前あまり近づかせてもらえなかった可能性がある。そんなこんなが重なり、家庭における景雄のことは子孫に全く伝わっていないのである。松田紀久子氏は御健在の御母堂の道子(仁禮一の妻)と「何で家庭における景雄の逸話が残っていないのだろう」と不思議がっておられるそうだが、わからないものはわからないとしか言いようがない。もっとも、決して長かったとは言えない婚姻生活である上に、かつ明治生まれのいよが「うちの死んだ爺さんはねー」と子や孫にペラペラ喋らなかつたとしても不思議な話ではないのか。

IV. 死後に散逸した仁禮景雄収集の海外産蝶類標本

妻のいよは「景雄は数年間欧州に遊学していた」と語り残しているのだが、この点は引っかけ。判明している仁禮景雄の経歴には空白期間が多いので断定できないのだが、数年もの間、仁禮が日本を離れていた形跡は認められない。明治43年の洋行時、仁禮は7月に英国で軍艦生駒を下船し、9月にイタリアで乗船している。よって、この「数か月の欧州漫遊」が「数年の欧州留学」と間違っただけの子孫に伝わったのではないかと、筆者は推測する。

さて、筆者は「現在、九州大学の残る仁禮景雄コレクションには欧州産のチョウは1頭もない。どうやら仁禮は標本に執着しないタイプの研究者ようだ」と書いたことがある(保科, 2015a)。しかし、この推測は本稿にて訂正しなくてはならない。

子孫に伝わる場所によると、仁禮は海外産チョウ類標本を確かに日本に持ち帰っていた。仁禮が収集したチョウ類標本のうち、日本、朝鮮、台湾産のチョウ、つまり当時の大日本帝国産標本については、時期不明ながら、仁禮の死後、東京帝国大学に寄贈され、後に九州帝国大学に移管されたことは保科(2015a; 2015b)で述べた通りだ。しかし、どうやら、寄贈後も海外産チョウのコレクションについては仁禮家に残っていたようである。と言うのも、景雄の長男の仁禮一は生前、娘の松田紀久子氏に「オヤジの外国のチョウの標本は高く売れた」と語っているからである。

これについては、多くの憶測を述べることができよう。例えば、景雄自身が妻のいよに「自分のチョウ標本は東京帝国大学に寄贈せよ。しかし、外国のチョウはカネになるから、いざと言う時のために手元に残しておけ」と遺言したのか。それとも、景雄の旧友が残された妻や子の将来を案じて、「外国のチョウだけは簡単に手放すな」と助言したのか。いよが大日本帝国産チョウと欧州産チョウ、つまりカネになるチョウとならないチョウを簡単に区別できたとも思えず、誰かが景雄の遺族に入れ知恵してくれたのではあるまいか。

景雄の死後、決して裕福とは言い難かった遺族たちが、どこかの時点で外国産チョウの標本を手放したのはやむを得なかつただろう。なお、それらの標本が現在の日本のどこかに残っていたとしても、「仁禮家から買い取りました」との領収書等が付随しない限り、「これは仁禮景雄が外国で収集したものである」との確定はできないはずだ。仮に仁禮本人が欧州や南米で網を振って捕ったチョウであったとしても、仁禮は標本ラベルに採集者名を記していないからである(保科, 2015a)。

残念ながら仁禮が収集した外国産チョウ類標本は散逸したわけだが、そもそも海外産チョウ標本や書簡類を含め、景雄にまつわる品々は現在の子孫の家に全く残されていないと言う。景雄の死後、子孫は何回か引っ越しを繰り返しており、その過程で遺品類はほぼ失われてしまった。孫の松田紀久子氏は祖母のいよの部屋にチョウの額縁が飾ってあったのを記憶されている。非常に繊細な絵だったとのことなので、景雄が欧州から持ち帰った博物画の一種かと思われる。この絵が妻や子孫に伝わった唯一のチョウ関連の景雄の遺品だったようだが、これも残念ながら今は残されていない。



写真4 仁禮景雄の墓 (東京青山霊園)。

V. 青山霊園に眠る仁禮景雄

仁禮景雄の死後いよは再婚しなかった。遺族は仁禮本家の援助で生計を立てていたようだが、本家自身が塩田経営や農場経営に失敗していたわけだから (保科, 2015a), 景雄の遺族の生活は決して楽ではなかったはずである。いよがどのように景雄の2人の遺児を育て、大東亜戦争の激動の時代を乗り越えたのか。関心は尽きないものの、今となっては本人に聞く術はない。

現在、仁禮景雄は東京青山霊園で永遠の眠りにについている (写真4)。墓石には「大正十五年八月九日歿行年四十二」と刻まれている (注, 満年齢で換算するなら41歳で死去)。景雄は火葬ではなく土葬だった。長男の仁禮一氏によれば、いよの死後、納骨のため墓を開けた時、景雄の遺骸は全身水に浸かっている、あまり傷んでいない状態のまま保存されていたと言う。エジプトのピラミッドならまだしも、この温暖湿潤な日本で遺骸が半世紀近くも大きく傷まずに残るのか、との疑問が湧く。しかし、筆者は福井県が輩出した政党政治家の杉田定一 (1851-1929) を近年改葬した時、杉田翁の髭が秀麗なまま残されていたとの話を聞いたことがある。条件さえ整えば、遺骸が半世紀激しく腐敗しないと言うのはありえるのだろう。それにしても、仁禮はまさか自分の死後100年近くも経ってから、チョウの研究者でも何でもない筆者に己の生涯を徹底的に調べられるとは夢にも思わなかっただろう。筆者は「あなたの人生を根掘り葉掘り探ってしまっでごめんなさい」と墓に手を合わせた。

仁禮景雄は生涯最後の論文を発表してから、死去するまでの最晩年の5年間、一体どこで何をしていたのか。その点は相も変わらず不明のままである。彼は死の間際まで蝶の幻影を追い求めているのか。それとも精も魂も尽き果て、強健な体を持ち得なかった生涯を達観しつつ世を去ったのか。それは本人と神のみぞ知るところである。

VI. 謝辞

本稿を執筆するにあたり、仁禮景雄の写真を提供してくださり、かつ貴重な逸話を御教示くださった、景雄の孫の松田紀久子氏に厚く御礼申し上げます。

VII. 参考文献

- 福川秀樹編, 1999. 日本陸海軍人名辞典. 芙蓉書房. 561 pp.
- 長谷川仁, 1967. 明治以降物故昆虫学関係者経歴資料集. 一日本の昆虫学を育てた人々一. 昆虫, 35 (3), supplement: 1-98.
- 保科英人, 2015a. 蝶類学者仁禮景雄先生小傳. 日本海地域の自然と環境, (22): 111-131.
- 保科英人, 2015b. 謎の蝶類学者仁禮景雄. きべりはむし, 38 (1): 20-24.
- 白水隆, 1985. 日本産蝶類文献目録. 北隆館. 873 pp.
- 白水隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学研. 336 pp.
- 白水隆文庫刊行会編, 2007. 物故・日本の蝶研究者. 肖像写真と略歴. p. 311-330. 白水隆アルバム. 一日本の蝶界の回想録一. 365 pp. 白水隆文庫刊行会.